

## 仏教界に新風を

日本では現在、新しいカタチの仏教が話題になっている。僧侶が自ら出向き人々のお悩み相談にのる。お寺を開放して合コンの場として提供する。これらは本来の住職活動とは無縁である。

これらの流行を象徴するかのように今年2月、『美坊主図鑑』という全国各地のハンサムな僧侶を紹介する本が出版された。この本は僧侶による自由な活動を手助けしていきたいという思いのもとに作成された。わずか3ヶ月で1万5千部を売り上げ、現在も複数のメディアに取り上げられている。読者層は女性にターゲットを絞り、イケメン僧侶を取り上げている。最近の女性が男性のルックスを重視するようになったことをうけ、それを入り口にして読者を獲得したいと編集者である廣濟堂の高田順子氏は語る。

以前の日本では僧侶がメディアに露出することは固く禁じられていた。またかつての寺は人々が集まる場であり、生活と密着したものであった。そんなかつての姿に近い密着型を、現在また仏教に新風を取り入れることによって復活させたいと高田氏は語る。

その『美坊主図鑑』の中に出てくる浄土真宗本願寺派の藤岡善信氏は坊主バーの店主としての顔も持つ。東京・新宿区にある坊主バーでは様々な宗派の僧侶が客に酒を提供している。店内には仏壇や経典が置かれ、店に入ると線香の香りとともに袈裟をまとった2人の僧侶が笑顔で迎えてくれる。

店内は20人程度の客が入るほどの大きさで、平日にも関わらず席はサラリーマンから女子学生、主婦などあらゆる世代の客によって埋めつくされていた。「お寺の敷居を低くし、人々の言葉に耳を傾けたかった」と藤岡氏は開店当時の思いを語った。店を始めた当初は、女性客が多い今とは異なり、年配の男性客が中心で、客同士が荒れてけんかをすることも多かったという。また坊主バーという新たな試みに対し批判的な意見を持つ人もたくさんいたと藤岡氏は振り返る。

「私はこの店を新しい寺のカタチだと思っています」客の相談にのりつつ、バーだからこそ気軽に仏教の話をすることによって、少しでも仏教に触れる機会を与えたいという。

藤岡氏は日本の宗教観をどう捉えているのだろうか。「日本人は宗教に対して広く許容することのできる民族。その点を宗教家側がまず理解し、その上で絶対的な価値観を押し付けるのではなく、その人にあった様々なカタチで布教していきたい」藤岡氏はそう力強く語った。